

## 2003.10.15：循環型まちづくり調査特別委員会

### 委員長

ただいまから循環型まちづくり調査特別委員会を開会いたします。

まず、説明員の出席についてであります。本日は、環境局から局長ほか関係職員の方々に御出席をいただいております。

本日の日程はお手元に配付の日程のとおりであります。参考人といたしまして、株式会社富士総合研究所環境・安全グループ地球環境研究室主事研究員の羽田謙一郎先生と、東北芸術工科大学環境デザイン学科助教授の三浦秀一先生をお招きいたしております。羽田先生にはバイオマスエネルギーの現状と将来展望というテーマで、三浦先生には市民からみる新エネルギー利用というテーマでそれぞれ20分程度お話をさせていただき、その後それぞれ10分程度の質問の時間をとらせていただきたいと思いますと考えております。

なお、両参考人からの御説明のときに使用いたしますスクリーン等を設置いたしておりますので、御了承願います。

それでは、皆さんに羽田先生を御紹介させていただきます。

先生、本日は大変お忙しい中、当委員会のためにお時間を割いて御出席をいただきまして、まことにありがとうございます。心から感謝を申し上げます。

羽田先生からお話をいただく前に、私の方から簡単に経歴を御紹介申し上げたいと思います。

先生は、平成7年、芝浦工業大学工学部工業化学科を御卒業され、平成12年、東京農工大学大学院生物システム応用科学研究所博士課程を修了いたしました工学博士でございます。同年、株式会社富士総合研究所に入社され、平成15年、同研究所環境・安全グループ地球環境研究室主事研究員として現在に至っております。主にバイオマスエネルギーを中心といたしました新エネルギーの導入普及、技術動向や循環型社会構築等に関する調査研究に従事をされております。そのほかにも共著として、バイオマス・ニッポン日本再生に向けて、バイオマスハンドブック等を執筆されております。

それでは、羽田先生よろしく願いいたします。

### 委員長

三浦先生、どうもありがとうございました。限られた少ない時間の中でお話いただき、ありがとうございます。

この際、三浦先生の方に質問あるいは何か聞いておきたい点がありましたらお願いいたします。

池田友信委員

大変貴重な先生のお話を聞きまして、私も実は議員を25年、7期やっていますが、20年、川の問題とそれから森林の問題含めていろいろやって、特に私、梅田川の関係でいろいろやってみてつくづく感じるのは、先生のお話した部分と非常に重なる部分があるんですが、森林とバイオマス、特に仙台の木の問題、森林は、私なりの考えですけれども、都心部の木の扱いと、それから郊外の部分の木の扱いと二つあるのではないかと思うんです。都心部の木の扱いとして、杜の都の杜という字は雑木の森ではないところに私は仙台の理念というものがあってしかるべきであって、ここでいわゆる杜の都のバイオマスエネルギーとかそういうことを考えると、特に梅田川も全くまちの真ん中を通る川ですから、これはまちの川に対する、あるいは森に対する、杜の都という考え方が末端まで流れてくるという考え、理念が生かされないといけないと思うんです。

そこで、先生の1ページの新エネルギーの利用形態の中にもう一つ入れて考えるべきではないかと思うのは、市民の活動エネルギーというんですか、活気、それから郷土愛です。そういうエネルギーというのは、私は非常にこの杜の都の考えにラップするものがあります。特に梅田川を清掃していくと、今まで汚かったときは全く地域の活力がない。清掃してきれいになると、そこでみんなで自分の郷土を愛する、そういう活力が出てくる。それが今、仙台の中の杜の都の理念がないがために活力に欠けているのかなという感じがするんです。

そこでやはり考えてみますと、今までの植林のあり方というのはちょっと間違えたのではないかなと。間伐していき、結局早く材木に利用するというために山を削ってきましたから、それに対する弊害が50年にしてやっと出てきました。保水力がなくなってきたり、水質が悪くなったり、そういうことをやはり考えなければならないということで国がやっと緑の改良政策というのを出されて、広葉樹、落葉樹を考えようということで復元してきているわけですね。ここでいきますと、要するに間伐していく、確かに今現在間伐しないとできないんだと思うんですけれども、果たしてこれでいいのかなというような感じがするんです。もっとやはり本来あるべき森の姿、山の姿、そういうことに対して現在の植種は間違っていないかなと。杉とか常緑樹だけで、果たしてこの日本の国土とか環境を含めていいのかなというような疑問を私は持っているんです。したがって、現状の中ではやはり手入れをしなければいけないけれども、もとに戻す手入れの仕方をやはりこれからこういう形をしながら復元していく方向に変えていくことが、今、問われているのではないかと考えているんですけれども、先生いかがですか。

三浦秀一参考人

私もまさしくそのとおり、同じようなことを思っておりまして、やはり針葉樹中心の人工林というのは、なかなか、今、いろんな意味で限界もあるのではないかと。

一方、広葉樹林の方を見ても、こちらもやはり昔は人が入って、里山の中で山に手を入れていったわけですが、それも、今、当然行われていないという状況の中で、広葉樹林も非常に荒れてきているというようなことを仙台の近郊の山の人たちにも聞くわけなんです。例えば広葉樹林もやはり切つていかないと次の株が出てこないというようなことが随分言われておりますけれども、そういったことを含めて、人工林の間伐のみならず、もう少し森林の樹種を変えていくことも含めながら、では広葉樹林の手入れはどうしていくのかということも含めてバイオマスは考えていかなければならないとは思いますが、いずれにしろ、どういう木が植えられているのか、どうあるべきかということ、山と都市住民のつながりというものは今までほとんどなかったのではないかと思いますけれども、こういうバイオマスというものを通して山を見る目というものが出てくれば、これもまた一つ収穫ではないかなというふうには思っております。

池田友信委員

やはりこれからの中では、今までの森林管理というのは手数がかかる、要するに雇用対策の一つの産業としてそういう植種を植えてきた弊害が、2割しか利用されないこういう状況の中で、結果的には手つかずの状況になって荒れてしまったというふうな循環になっていると思うんです。

この間も、志津川の海の漁業組合が、自分たちの山手の方に海にいい植種を植えようというふうな形で植林をしている組合もありましたけれども、もともとやはりそういった海の豊かさも含めた植林のあり方というか、水の保水と管理ということを考えていくと、戦後の経済復興の中でやってきた政策というのは、そういう意味では大量生産、大量消費のやり方の植種なんですよね。ですからそういう部分でもう少し、本当にこれからの生態系を含めた部分と、要らぬエネルギーをかけなくても済むような循環型のことを考えていくと、そういうところに対するあり方をもう1回考えていかなければいけないかなと。そのための植種も考えていかなければいけないかなという感じがします。

委員長

再開いたします。

それでは協議に入ります。

本日の参考人からの意見聴取、これまでの委員会におけます当局からの報告事項等を踏まえまして、委員間の協議を行いたいと思いますので、よろしく願いいたします。

どなたからでも結構ですので、今までを踏まえまして御意見があればお願いしたいと思います。

#### 池田友信委員

さっきもちょっと話したんですけれども、これは環境の分野で考えるのか、それから、ちょっといろいろ考えていただければいいかと思うんですけれども、杜の都という代名詞を仙台はいただいているし、これは市民もそうですし、他都市からもそう言われているんですが、意外とその理念のはっきりしたものがあるのかないか、どう整理されているのか。特に環境の部分においてこの考え方が、仙台の一つの代名詞である杜の都という部分がこれから非常に重要になってくると思うんです。何できへんに土かということを見ると、いろんな説がありますけれども、ふさというふうに読めると。字源からいくと、整然と実のなる木を非常にまちの中に植えてあったと。それが繁茂してまち全体が杜という状況だけれども、雑木の森ではないということを考えていくと、この理念が私は環境の中では、特に今論議された森林の問題とか、それから循環型のまちを考えていくと。そういう考え方が踏襲されて植林をすとか、あるいはこれからの復元をすとか、ケヤキの木の環境をどういうふうにするのかとか。そういうことがないと、時代が来たからケヤキを切ってしまうと移すとか、そんな問題ではないのではないかなという感じがするんです。

そうするとこれから、例えば街路樹の樹種の設定も含めて考えていかなければいけないと思うんですが、そこからやはり市民全体で環境を考えた循環型のまちをこういう理念のもとにみんなで考えてみよう、あるいは復元してみよう、あるいは壊さないようにしようというような形にいかないといけないかなという感じがするんですけれども。その辺についてきょう講師の話聞きながらちょっと感じたものですから、局長、何か考えがあったら御所見をお伺いしたいと思います。

#### 環境局長

逆に私は今感心して伺っていたところで、私が御答弁申し上げる立場にはないかもしれませんが、おっしゃるとおりに、藩政時代以来、仙台が営々と築いてきたこの杜の都という起源は、やはり武家屋敷にあるというようなことは私は伺っておりました。当時は、一つは用材確保、それからもう一つは生活

の中での糧と申しますか、仙台藩が貧乏だったということなのかもしれませんけれども、実のなる木を植えたり、あるいは菜園をつくったりで、なるべく自分のところで生活を維持していくという思想の中でまちづくりがされてきたと。

基本的には、今、委員御指摘のとおりこの精神はやはりまちづくりの中にこれからも息づいていくべきだと私は思います。いろいろ取り巻く環境といえますか、環境自体は変わってきております。江戸時代と比べれば全く違う次元の世界に我々は生きているわけでございますけれども、しかし、その環境を守るために自分たちが日常の生活の中でやれることを一生懸命やって、そして守っていくと、そういう精神はやはり受け継がれていくべきだと思います。したがって、先ほどからいろいろ先生方のお話にもございましたとおりに、木という問題だけではなく、循環型社会を目指すということはまさに我々が過去から受け継いできた仙台の今ある環境を将来に受け継ぐこと、まさにそのことを意味しているというふうに理解をいたしております。非常に抽象的な御答弁を申し上げますが、そういうことでございます。

#### 池田友信委員

やはりそういう意味では、環境局というとイコール清掃関係を中心とした所管でというふうに、環境を悪くしないための対策局というような感じがありますが、くしくも開府400年という歴史を踏まえた、越してきた都市ですから、私はそういう意味では環境局で一つの、例えば400年前の空気の状況とか水の状況等、あるいは人の住む環境を含めて、果たしてどういう形で変化してきた、どういう形でよくなったのか悪くなったのかという、そういう総括も本来は開府400年の歴史の中で私は姿勢としてまちがそういう総括をして、これから向こう100年、400年に向けてどんな形でいいまちを子孫につくっていくか、残していくかというようなことも、これは一つの考え方としてあっていいのかなという感じはします。この機会だからこういうことを話すんですけども。やはりそういう意味で杜の都という部分の環境が、本当にこれから仙台市のまちづくりの中での考え方として、環境局としてはこんな形で提言していきたいというようなものをこれからも考えていく、そういうシンクタンクの局であってほしいなという感じがします。意見です。

#### 委員長

今、池田委員から意見が出ましたが、基本的には当局に対する質疑ではなくて、例えば今池田委員から出た中で杜の都の理念とか、皆さんが当局にアドバイスしたい点があれば、どんどん池田委員に聞いてもらっても構いませんし、皆さ

んの意見があれば出していただきたいと思います。そして、最初に申し上げておきますが、きょうはフリートーキングでいろいろお話しをいただき、次回あたりに一巡して新エネルギーに対する皆さんのお考えをいただければと思います。ですから、むしろ向こうを向くよりも委員間同士で、例えば、今、池田委員から出たものに対して、私はこういう考えがあるというのがあれば出していただきたいと思いますし、そのほかの意見があれば皆さんの方から承りたいと思いますので、そのような進め方でよろしいですか。

委員長

では、そのように進めたいと思います。ほかにございませんか。

委員長

ただいま加藤委員の方から、人的資源の活用や杜の都のイメージで里山の整備などが必要ではないかという意見が出たようなんですが、それに対して何かあれば、あるいはまた別な意味で皆さんから御意見等ございますか。

池田友信委員

私は、一つは開府400年もそういう一つの話題としてこれからの環境のことを考えていった場合に、400年前と比較してどうなのかと。データはないけれども考えれば、人口とか、食糧とか、生活関係とか、逆算すればこれは数字、データとして出ると思います。そんなことで比較しながら現在の問題点を市民にアピールするとか、我々、議会で特別委員会を設置した以上は、この中で後ほど委員長の方からも見解があると思うんですけども、ある程度最終的には提言して、議会でこういうことをやったということを市民にアピールもしなければならぬのですから、そのときに、いろんな意味でなるほどという部分を我々のこのメンバーでいろんなものを提言してやっていくことが非常に私は重要だと思います。その中で市民が環境ということに対して比較をしながら、あるいは問題意識を持って、これからは先ほどからいろいろ出されているように、もう一点集中とか大量生産とかそういう時代ではなくて、それぞれの地域でいかにその環境に対して取り組んでいくかという運動を起こすことが私は必要だと思うんです。それがこの循環型の具体的な取り組みの中で重要なことであって、特効薬とか、何かこれ一つで循環型社会になるということには私はないと思うんです。そうすると、いかにしてそれぞれの地域の特徴を特性を持って進めていくかと、あるいは取り組んでもらえるかというものを我々議会側から発信をして市民に参加してもらう、あるいは取り組んでもらう。それが行政とどういうふうにドッキングするかと。その中で行政側もやはりこの地域はこうい

うことという政策を打ち出して、一緒になって参加するというものを見出していくかということが必要だと思うんです。

だからそういう意味では例えば、先ほどから林業の問題が出ていますけれども、本当は仙台市有林というものがあるわけです。市有林と云って、仙台市域だけではなくて仙台市域以外にも市有林がありますから、そういうところの環境問題も含めると、私は、仙台市は市有林を持っているんですから、今までのような植林でいいのかということをこれで総括すると同時に、やはりモデルをつくっていくことが必要ではないかと。それが先ほどの間伐材とか何かの問題も含めて、では仙台市の市有林はどんな管理をしてやっているのかということになると、これからの中ではやはりそういうことを我々からも提起すると同時に、モデルになるような環境づくりをやれることがあると思うんです。それを我々から最終的に問題提起して、そういうことをもう少し改善してほしい、改善すべきだというようなこととか、先ほど言ったようにいろんな消費の問題を含めると、その地域でやれることというのはあると思うんです。その辺をみんなで模索していくことが必要ではないかなと。

私のおやじ、おふくろも亡くなってしまいましたけれども、小さいころとか明治の前ころは、生活から出てくるごみというのはなかったと言っていましたからね。例えば食事をした後どうするかというと、食事をした茶わんとかというのは、全部食べたものに最後にお茶を注いで、たくあんで茶わんを洗って、そして残った骨とかは全部焼いて食べて、そしてこういう茶わんを入れるセットの箱がそれぞれあって、そこに自分でふきんではたんとして、食事の後の残飯が出ないんだもの、きれいなんだから。そのために最後にお茶を飲めよと。お茶を飲んでのどを潤すと同時に茶わんを洗えよと。そのためにたくあんもあるぞというふうな生活をしていて、うちの周りから雑排水なんていうのは、下水処理なんていうのは、全部排便も含めて自給自足です。うちの周りも垣根が何かといったらお茶の葉だから。お茶の葉っぱをつんで、自分でお茶をつくってというようなやり方でしょう。全部自分。先ほど言った開府400年というのは、そういうところから見ると余りにも大量生産、大量消費、一点集中、そこまでいかないけれども、戻らないけれども、そういう生活の仕方をもう1回考えていくというか、ではどこまで戻れるのかというか、今それでいいのかというようなこととか。例えば下水なんていうのは、全く今末端処理でしょう。こんなやり方でいいのか。電力だってもう末端電力ではないです、局地電力です。局地発電になっています。そういうことを行政側で考えられることを考えていかないと、やはり循環型社会には私はならないという意見です。異論もあるでしょうけれども。

